



Title	『レイミア』に現れる三つの目
Author(s)	村井, 美代子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1994, 28, p. 21-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47826
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『レイミア』に現れる三つの目

村井美代子

1

グロテスクな蛇の姿を持つヒロインの恋を描いたキーツ (John Keats) の『レイミア』(Lamia) には、レイミアだけでなく、ヘルメス、リシウス、アポロニウスら登場人物の目、彼らの見るといふ行為の描写が頻繁に現れ、物語は「見ること」をポイントに展開する。姿の「見えない」ニンフを探すヘルメスは、レイミアの力で愛しいニンフを「見る目」を得る。コリントの若者リシウスに「一目惚れ」したレイミアは、ヘルメスの力で美女に変身し、リシウスをじっと「見つめる」。見つめられたリシウスは、禁を犯してエウリディケーを振り返り見つめたオルフェウスのようにレイミアを「見つめ」、恋に落ちる。やがて「眼光鋭い」アポロニウスがレイミアの正体を「見破り」、二人の恋は破滅する。

各々が生きる境界の違いはひとまず置き、恋愛面に注目すれば、ここにはヘルメス、リシウス、レイミアら恋に惚けて現実から遊離し、魔力で成立した世界に生きる者の憑かれたような非理性的な目、visionary の目、幻視の目とも呼び得る目と、恋の狂熱を冷徹に見つめるアポロニウスのあくまでも現実的で理性的な目がある。一方物語を異界の住人との交渉・婚姻を描いた民間伝承の枠で捉え、凶眼迷信が強く残る地中海地方が舞台である点を考慮すれば、自らが生きる境界を越えて結ばれるレイミアとリシウスの目に対立するアポロニウスの目は、理性の目には程遠い、迷信的で

魔術的な目、いわゆる凶眼 (evil eye) の特質が濃くなる。

本論では恋に惚ける目と理性の目と凶眼の三つを『レイミア』にたどり、アポロニウスが相反する二つの性質の目を持つ故、物語に揺れが生じ、恋人達の目が理性の目に破れる話であると共に、自らの目に似た極めて非理性的な目に破れる話でもある二重の読みが可能になる点を明らかにし、その意味を考察したい。この構造は合理主義思想の洗礼を受けた社会に見られる、理性による非理性的なものの排除・破壊と、科学や合理主義思想に縁遠い民間伝承の世界での、非理性的なものによる非理性的なものの排除・破壊をパラレルに置き、その相似性を示していると言えないだろうか。

2

まず物語の恋愛に注目したい。最初はヘルメスとニンフの恋である。オリンポス山からクレタ島に降りたヘルメスは、うわさに高い美しいニンフを探すが姿は見えない。やがて蛇レイミアに会い、彼女を女の姿に変えるのと引き換えに、好色な男の目からレイミアの魔力に守られ、誰にも見られず生きているニンフを唯一人見る目を獲得する。

“Stoop, Hermes, let me breathe upon thy brow,
And thou shalt *see* thy sweet nymph even now.”

The God on half-shut feathers sank serene,
She breathed upon *his eyes*, and swift was seen

Of both the guarded nymph near-smiling on the green.

(I, 121-125)¹⁾

「目」にレイミアの魔力を受けたヘルメスにはニンフが「見え」、二人は森へ去るが、このニンフの姿は本来誰にも見えないので、喜々として虚空を抱くヘルメスの姿は第三者の目に異様であり、恋する彼の目は現実を越え

た vision を見る目、何かに憑かれた非理性的な目と映るだろう。この恋は後半のレイミアとリシウスの恋の儂さを鮮やかにしていると思なされることが多い。²⁾ 確かにエピソードの最後に「二人は緑の奥深い森へ飛んで行った／人間の恋人達のように青ざめはしなかった」(I, 144-145)とあり、人間界にはない恋の永遠性が示されていると言える。が束の間の恋であることも否定できない。冒頭のヘルメス登場場面を見てみたい。

The ever-smitten Hermes empty left
 His golden throne, bent warm on amorous theft.
 From high Olympus had he stolen light,
 On this side of Jove's clouds, to escape *the sight*
 Of his great summoner, and made retreat
 Into a forest on the shores of Crete. (I, 7-12)

これは「偉大な召喚者の目」、全能者ジョヴの「目」を一時避けた恋であり、ヘルメスは再びオリンポスへ戻されよう。恋に惚けた者を現実へ引き戻すジョヴの目には、後半のアポロニウスの目に通じる機能がある。またキーツが愛読したランプリエールの神話辞典によればヘルメスは「絶えず恋に悩む」神で、その子の数は彼の恋人の数同様無数であり、³⁾ 恋多きヘルメスがこの恋を永遠に貫くとは考えにくい。恋の永遠性よりむしろ人間に不可能な恋人を見る目の独占、束の間の恋の盲目性が鮮やかだと言える。ヘルメスと取引するレイミアもまた恋に悩んでいる。

She *saw* the young Corinthian Lycius
 Charioting foremost in the envious race,
 Like a young Jove with calm uneager face,
 And fell into a swooning love of him. (I, 216-219)

リシウスを「見た」レイミアは現実の醜い姿もわきまえず一目で恋をし、やがて美女に変身して待ち伏せし、近づく彼をじっと「見つめる」。

Lamia beheld him coming, near, more near —

.....

“Lycius, look back, and be some pity shown!”

He did — not with cold wonder fearfully,

But Orpheus-like at an Eurydice. (I, 237-248)

振り返って見つめた故に永遠に会えなくなったオルフェウスとエウリディケーへの言及は、この恋の悲惨な結末を暗示しているが、リシウスはオルフェウス同様運命の一瞥をレイミアに投げ、「彼の目は彼女の美しさをたちまち飲み干し」(I, 251)、恋の虜になる。二人は人目を避け、眠っている間もお互いの姿を見ようと薄目を開け(II, 23-25)、身を屈めて覗き込むレイミアの瞳にリシウスは楽園にいる己の姿が小さく映るのを認め(II, 46-47)、現実を放擲し恋人だけを見つめる日々を送る。

やがて遙かなトランペットの音に徐々に現実を意識し始めるが(II, 26-34)、恋に惚けた彼らの目を決定的に現実へ引き戻すのは、リシウスの哲学の師アポロニウスの目である。彼の眼光の鋭さは前半で早くも言及され(I, 364)、二人の婚礼の招待客がその見事さに驚嘆の声をあげる中、アポロニウス唯一人が冷静に「鋭い目」ですべてまやかしであることを見抜く。

Save one, who looked thereon with *eye severe*,

And with calm-planted steps walked in austere.

'Twas Apollonius: something too he laughed,

As though some knotty problem that had daffed

His patient thought had now begun to thaw,
And solve and melt — 'twas just as he foresaw.

(II, 157-162)

招かれざる客として押しかけた無礼をリシウスに詫びつつ、「来ざるを得なかった」(“yet must I do this wrong.” II, 168) と告げ、彼は二人の真向かいに座り、レイミアを執拗に見つめる。やがてその鋭い視線を弟子リシウスになじられたアポロニウスは、彼を「愚か者」と叱咤する。

“Fool! Fool!” repeated he, while his eyes still
Relented not, nor moved; “From every ill
Of life have I preserved thee to this day,
And shall I see thee made a serpent’s prey?”

(II, 295-298)

愚かな恋に我を忘れた愛弟子を、現実に戻してやろうと努めるアポロニウスの冷静な目に見つめられたレイミアは瞳の輝きを失い、「蛇だ」と一喝された途端消え、リシウスもまた一部始終を見て死ぬ。

ところでレイミアの正体暴露の直前には次の一節が挿入されている。

Do not all charms fly
At the mere touch of cold philosophy?
There was an awful rainbow once in heaven:
We know her woof, her texture; she is given
In the dull catalogue of common things.
Philosophy will clip an Angel’s wings,
Conquer all mysteries by rule and line,
Empty the haunted air and gnomèd mine —

Unweave a rainbow, as it erewhile made
The tender-personed Lamia melt into a shade.

(Ⅱ, 229-238)

科学的実証主義による虹の分析・破壊を嘆いた直後アポロニウスの眼力によるレイミア消滅が起こるため、彼の目には虹を冷たく分析する科学者の目が重なり、何物にも惑わされない冷徹な理性の目の要素が一層濃くなる。恋と目の密接な関係同様に、目を理性のシンボルとみなすのもまた伝統的な傾向であり、フランシス・ハクスレーは特にフランス革命期の絵画にその例が顕著な点を指摘している。⁴⁾『レイミア』では恋人達の非理性的な目と、それを見つめ論ずる年長者の冷徹な理性の目というコンヴェンショナルな相反する二つの目を使って恋愛物語が展開する。

3

アーネスト・ド・セリンコートは、先の虹の破壊への非難の一節だけでキーツの科学に対する態度を単純に推察するのはよくないとした⁵⁾が、ここで視点を変え、この恋愛を民間伝承の枠で捉え直すとアポロニウスの科学者のように理性的な目は異なった特質を帯びる。

そもそもレイミアの物語はロバート・バートンの『憂鬱の解剖』(*The Anatomy of Melancholy*)に基づいている。⁶⁾バートンは人間と動物の恋や、この世ならぬ世界の住人と人間の恋を論じ、一例にレイミアの話を挙げる。結びに「多くの人がこの事件を目撃した。ギリシアの真ん中で起こったから」とあるように、この話は口承伝説、民間伝承に起源を持つ。異界の住人が人間と結ばれる異類婚は民間伝承に典型的パターンであり、『レイミア』は異類婚の他にも民間伝承の要素を含んでいる。他のロマン派詩人同様キーツもパーシー (Thomas Percy) やスコット (Sir Walter

Scott) のバラッド集に親しんだ。妖精や悪魔やマザー・ハーバードに言及した手紙⁷⁾からも、彼が様々な物語に触れたことは推察できる。今バラッドや物語を細かく検討する余裕はないため、民間伝承のモチーフ・インデックス⁸⁾を参照して『レイミア』の民間伝承文学的要素を見てみたい。

アザランや人魚が人間と結ばれる、いわゆる異類婚は民間伝承に頻繁に現れ、蛇の例も多い (B656.2, T111, T111.0.1)。これは西洋のみならず、『鶴女房』や『信太狐』など日本の民間伝承や御伽草子でもなじみ深い。例外もあるが人間と異類との結婚は時に獣婚と同一視されるほどのタブーであり、最後に異類の正体がばれ、異界のものが異界に戻る愛の破綻を大前提とした展開が一般的である。『レイミア』ではすでに第一部の最後で結末の悲劇が予告される (I, 394-397) が、異類婚が土台である点を考慮すれば、レイミアの正体がばれて結婚が破綻する結末は当然の成り行きと言える。こうした異類婚の束の間の愛も「見る」こと、一目惚れから始まり、相手を思うあまり気を失うことも多い (T15, T24.2)。これは初めてリシウスを見たレイミアが「気絶せんばかりに彼を愛した」(I, 219) ことや、つれないレイミアの言葉に気を失い、何度かトランスに陥るリシウス (I, 287-300) の行動にも通じる。

また大前提とはいえ異類婚の破綻はタブーを破るため生じるが、ここでもタブーが幾つか破られる。生きる境界の違う相手と結ばれるのは勿論、それを公に誇るのも愛の破綻を生むタブーである (C31.5, C112)。二人だけの生活に満足せず、式を挙げてコリントの人々を驚かせようとするリシウスに同意しかねるレイミアには、このタブーが浮かんたのかもしれない。

“Let my foes choke, and my friends shout afar,
While through the throngèd streets your bridal car

Wheels round its dazzling spokes." The lady's cheek
 Trembled; she nothing said, but, pale and meek,
 Arose and knelt before him, wept a rain
 Of sorrows at his words; at last with pain
 Beseeching him, the while his hand she wrung,
 To change his purpose. (II, 62-69)

さらに異界の住人が人間に名を知られるのは決定的な弱点となり、人間から異類の妻の秘密や名を尋ねるのはタブーである (C31.4.1, C31.9, C435.1.1)。ところが式を決めたリシウスは、レイミアにそれまで聞かずにいた彼女の名などを、“Hast any mortal name,/Fit appellation for this dazzling frame?/Or friends or kinsfolk on the citted earth ...?” (II, 88-90) と尋ねる。そして最後に彼は妻の名を繰り返し叫び、変化し始める妻の側で一部始終を見るが、たとえ不本意であれ変身中の妻の姿を見たり、本性を知るのもタブーである (C31.1.1)。

以上のようなタブーは普通異類を変身させて人間界へ送るヘルメスのような存在、或いは異類本人から人間に「～するな」とあらかじめ課されることが多い。それが破られるのは必然であるが、破った罰にもパターンがあり、異類と人間双方の死、或いは本来生きていた境界への突き戻しが起こり、変身していた者は否応無しに元の姿に戻る (C921, C932, C952, C963)。ところが『レイミア』ではタブーが破られているものの、最初にヘルメスからレイミアへ、或いはレイミアからリシウスへ、それが正式に課されていないため、異類婚破綻の決定的要因になりにくい。代わりに決定的ダメージを与える役割を担うのがアポロニウス、彼の目という展開になる。

しばしば民間伝承の共同体では、異常現象や原因不明の災害・不幸の根

源を科学的、理性的に解明せず、一方的にある人間のせいにし、不合理に共同体から差別・排斥する傾向が強い。このようにある人を「有害」と判別するしるしの一つに頻繁に用いられたのがいわゆる「凶眼」である（D 2061.2.1, D2071.1）。民間伝承の世界では異常に鋭い視線、人と異なる色・輝きを持つ目が睨めば必ず災いが来ると強く信じられていたが、これは元来東地中海で発生し全世界に広まり、今も地中海特にイタリアやギリシア、トルコで迷信として根強く生きている。レイミアがクレタ島で変身し、コリントでリシウスと暮らし、そこに眼光鋭いアポロニウスが現れ、彼の目の力で不幸が訪れる物語設定は、凶眼伝説にうまくかみ合うと言えよう。

心から宴を楽しむ人々の中で、唯一人全く席になじめず、異質な存在のアポロニウスには一抹の不気味さが漂うが、その眼光の異常な鋭さは前半からの彼の登場場面で必ず言及されている。⁹⁾ 凶眼の災いを避けるには勿論目を合わせないことだが、レイミアとコリントの町に戻ったリシウスはアポロニウスと擦れ違う時、マントの奥に隠れ彼の鋭い視線から目を逸らす（“Lycius! Wherefore did you blind/Yourself from his quick eyes?” I, 373-374）。また婚礼の席でレイミアの異常に気付いたリシウスの、コリントの人々を前にしたアポロニウスの目への激しい非難・糾弾は、哲学の師に対する礼儀にふさわしくなく、民間伝承の中で或いはゴーチェやメリメなどの凶眼を扱った小説の中で、この目の持ち主に浴びせられる呪いの言葉、公からの排斥に通じる激しさと執拗さがある。

“Shut, shut *those juggling eyes*, thou ruthless man!

Turn them aside, wretch!

.....

Corinthians! Look upon that gray-beard wretch!

Mark how, possessed, his lashless eyelids stretch

Around *his demon eyes!* Corinthians, see!

My sweet bride withers at *their potency.*" (II, 277-290)

正体がばれたレイミアは、バートンの話では「泣いてアポロニウスに黙っていてくれと頼む」が、ここでは精一杯手を動かし彼を黙らせようと努める(II, 301-303)。これは尖ったものや指を凶眼に向け、貫く仕草をする魔除けの動作に関わるのかもしれない。¹⁰⁾ いずれにしても凶眼に睨まれれば必ず不幸がやって来る民間伝承の筋書き通り、幸せの絶頂にあった婚礼はアポロニウスの目の一睨みで一瞬に破綻する。このように合理的説明の不可能な不思議な力を宿す目もしばしば小説や絵に現れ、¹¹⁾ 婚礼の客を引き留め、話を聞かさずにおかないコールリッジの老水夫のきらめく目も、この不思議な力を宿す目と言えるだろう。愛の破綻が大前提の異類婚に基づく民間伝承の色濃い恋愛と見た場合、物語は異界の住人に恋する異常な目と、同様に説明し難い迷信的・魔術的な二つの目を使って展開する。

4

このようにアポロニウスの目が冷徹な理性の目と迷信的な凶眼の要素を持つため、物語は恋人達の目が理性の目に破れる話である一方、自らの目によく似た非理性的な目に破れる話でもあるという異なった二つの読みが可能になるのだが、最後にこの二重構造の意味を考えたい。

『レイミア』に現れる「見る」という行為、「目」のイメージに注目した批評家は少なく、アポロニウスが代表する理性的な現実界と、レイミアとリシウスが浸る恋や想像力の世界との対立という図式で捉え、前者の後者に対する最終的な優位を読み取るのが一般的傾向である。この二つの世界の対立意識や、科学と理性の批判、想像力の擁護は当時の詩人が繰り返

し訴えたテーマで、その意味で『レイミア』も時流に乗った作品と言える。ラム (Charles Lamb) や ハズリット (William Hazlitt) ら当時の文人や詩人はニュートンや合理主義思想を激しく非難し、キーツも「ゴブリンはヒースの野を追われ、虹はその神秘を奪われた」と述べた。¹²⁾ この背景を考えると、哲学者の目が恋に惚ける者の目を砕く物語は、理性による非理性的なものの排除、想像力の排除という当時の社会状況の縮図と読める。

だが批判を明確に出す詩人に比べ『レイミア』は、アポロニウスだけでなく、時にレイミアやリシウスにも批判的で、哲学者か恋人達かいずれを擁護するのか不明瞭であり、その曖昧性故に評価は低い。この曖昧性の一因に、物語の二重の読みが挙げられる。この二重性、物語の揺れは、当時の状況を彼方の民間伝承の世界に重ねた時、vision の破壊は近代合理主義思想だけが生んだ現象ではなく、過去の世界でも再現可能なこと、すでに破壊が彼方に存在していたことが感知された結果と言えるのではなからうか。勿論これは想像力排斥の責を、専ら近代合理主義思想に課す当時の詩人達の主張とは趣を異にするが、この vision を見る目の破壊、ないし vision を見せてくれる者の排斥の遙かな歴史は、冒頭から示されている。

Upon a time, before the fairy broods
Drove Nymph and Satyr from the prosperous woods,
Before king Oberon's bright diadem,
Sceptre, and mantle clasped with dewy gem,
Frighted away the Dryads and the Fauns
From rushes green, and brakes, and cowslipped lawns.

(I, 1-6)

文学や芸術面で豊かな想像力の世界を築いたギリシア・ローマ神話の神を

妖精が追い払ったというこの考えは、16、7世紀特にエリザベス朝に優勢だった。神話の神に取って代わった妖精は当時の詩人の想像力を大いに掻き立てる一方、異教世界の住人として特にピューリタンに激しく排斥された。またチャーサー (Geoffrey Chaucer) は『カンタベリー物語』の「パースの女房の話」の中で、「アーサー王の時代イギリスの至る所に妖精はいたが、今や托鉢修道士が歩き回り、妖精は姿を消した」と述べ、パーシー (Thomas Percy) のバラッド集では「もはや妖精は死んだ」と嘆かれる。¹³⁾ かつてギリシア・ローマの神を追放した妖精が異教世界の住人として排斥され、さらに近代合理主義思想に追われる。豊かな vision を見る目は繰り返し破壊と排斥を受けて来たのである。

ハント (Leigh Hunt) は『レイミア』への批評文の中で、ロマン派詩人の活躍と科学的実証主義の時代が重なる現実に驚きを表明している。

It is remarkable that an age of poetry has grown up with the progress of experiment; and that the very poets, who seem to countenance these notions, accompany them by some of their finest effusions. Even if there were nothing new to be created, if philosophy, with its line and rule, could even score the ground, and say to poetry 'Thou shalt go no further,' she would look back to the old world, and still find it inexhaustible.¹⁴⁾

キーツもまた科学的実証主義が席卷する時代状況を十分認識していたはずである。その中でいかなる詩を生み出すかという課題に彼は彼方の世界を振り返り、招かれざる婚礼の客の目が幸福な vision を破壊するテーマを見いだした。彼はここに当時の想像力と似た状況を認め、さらには既存のものが予期せぬ侵入者に追われる歴史の反復性を感じたのではなからうか。

『レイミア』は確かに非難され得る曖昧性を孕んでいる。しかしながら何物にも代え難い想像力、合理的説明の不可能な目の捉える世界の破壊者を、理性の目と凶眼に重ねた曖昧・矛盾ともとれる二重の展開には、ある現象の反復性・再現性を視野に収める歴史的想像力が、確固たる identity を持たず、光も影も受容する自らをカメレオン詩人と呼んだキーツのしなやかな資質が垣間見えるように思われる。

注

- 1) 『レイミア』からの引用は Miriam Allott, ed., *The Poems of John Keats* (London: Longman, 1980) による。なお強調はすべて筆者による。
- 2) E. R. Wasserman, *The Finer Tone: Keats's Major Poems* (Baltimore: Johns Hopkins, 1953), p. 162.
- 3) John Lemprière, ed., *Lemprière's Classical Dictionary* (1788. London: Routledge & Kegan Paul, 1984, rev. ed.), p. 374.
- 4) Francis Huxley, *The Eye: The Seer and the Seen* (London: Thames & Hudson, 1990), pp. 38-39, pp. 92-93.
- 5) Earnest de Selincourt, ed., *The Poems of John Keats* (1905. London: Methuen, 1926), p. 459.
- 6) 1820年詩集の末尾にはバートンのレイミア物語が収録されている。
- 7) H. E. Rollins, ed., *The Letters of John Keats* (Cambridge, Mass.: Harvard U. P., 1958), I, 22, 25, 67, 120.
- 8) Stith Thompson, ed., *Motif-Index of Folk-Literature*, 6vols. (Indiana: Indiana U. P., 1955). 以下インデックス番号のみ示す。
- 9) Hermione de Almeida, *Romantic Medicine and John Keats* (Oxford: Oxford U. P., 1991), p. 191. ここでアポロニウスの目はバジリスクの必殺の目になぞらえられている。
- 10) Frederick Thomas Elworthy, *The Evil Eye* (London: 1895). 特に第6章 “Crescents, Horns, Horseshoes” 及び第7章 “Touch, Hands, Gestures” で凶眼除けが詳しく論じられている。
- 11) 小説としては先に挙げた Théophile Gautier の *Jattatura* が、また絵画では Gustave Doré が Honoré de Balzac の *Les Contes Drolatiques*

に寄せた挿絵（妖婦の視線が騎士と馬を倒す場面）等が挙げられる。

- 12) "On Edmund Kean as a Shakespearian Actor" (*The Champion*, 21 Dec. 1817).
- 13) Richard Corbet, "The Fairies Farewell" (1.37), *Reliques of Ancient English Poetry* 3vols., ed. Thomas Percy (N. Y.: Dover, 1966), III, p. 207.
- 14) Leigh Hunt, *The Indicator* xliiii (2 Aug. 1820).

本稿はイギリス・ロマン派学会第19回大会（1993年10月17日於琉球大学）での口頭発表に基づくものである。

（大学院後期課程学生）